「奇蹟」はなぜ起こるのか

——ホログラフィック・パラダイムを手がかりとして——

丸山敏秋

「奇瑞や奇蹟は、我等の祖先にとつては、珍しいことではなかつた。といふ意味は、かうした不可思議のことがあるのが当然のことで、奇瑞奇蹟の意義等と、取りたててせんさくする必要はなかつた。然し合理的に固まつた現代人には、先づ其の意味から確めて置かねば理解が出来ないことであらう」(丸山敏雄『奇蹟の研究』⁽¹⁾)

はじめに

敗戦後の東京で倫理運動を興した丸山敏雄は、三十七歳のときに九州北部での教師生活から一転して、新設された広島文理科大学の学生となり、日本古代史や神祇史を研究した。神典(『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』『風土記』等を中心とする古典)を中心に、そこに記載されている奇蹟的な出来事の解釈に苦しんでいたとき、新興の宗教教団「ひとのみち」と出会う。そこでは常識では考えられない出来事が日常的に起こり、多くの信者が体験している。敏雄は非常に驚き、みずからも体験すると、自身の研究を深める助けになると考え、同教団の教えに

親しむようになった。

大学の卒業論文を書き終えて卒業すると、ある師範学校の校長職が内定していたにもかかわらず、それを擲ち、宗教者としての転身を決意する。一切の俗縁を断って教団の指導者（ここでは「教師」と呼ばれた）になるべく、徹底した修行に打ち込む。やがて赴任先の熊本支部で「神は一体である」という最も肝心な教理に開眼すると、准祖の一人にも抜擢された。信徒を善導するための「神示」^{みしらせ}を授けることで、苦難が一気に解決したり、ときには奇蹟的な事例も生まれる実体験を積み重ねていく。

ところが戦時下の日本で、教勢が飛躍的に拡大する「ひとのみち」に脅威を覚えた政府当局は、すでに「大本」などの宗教団体を弾圧したと同様に、「ひとのみち」までも潰しにかかった。丸山敏雄も幹部の一人として「不敬罪」の汚名を被って獄中の人となり、一年二ヶ月の幽閉生活を強いられ、仮出所後は長い裁判に臨まなければならなかった。

公判に臨んで無実を証明するための準備（研究）に明け暮れつつ、「教団」のあり方や宗教活動そのものを深く反省する。しかし有罪の判決は覆せない。戦時下に移り住んだ帝都の片隅に逼塞して終戦を迎え、その後は失意の中で長編の論文『奇蹟の研究』に取り組んだ。起筆したのは昭和二十一年三月九日である。

*

日本の神典には、常識では理解できない数多の不可思議現象、すなわち奇蹟（奇跡）や奇瑞の記載があり、民間伝説にもそのような事例は枚挙にいとまがない。日常世界でも、死の淵にあった病が突如として癒えたり、まったく売れない商品が一夜にして飛ぶように売れるといった奇蹟が起こる場合がある。丸山敏雄が提唱した「純粹倫理」の生活法則を実践することで苦難から一気に救われる体験にしても、現代人の理解はなかなか及びがた

い。しかし実際に体験者は数多く存在しているのである。

そうした不可思議な奇蹟や超常現象は、どうして、どのような状況で起こるのか。その謎を研究することで、「純粹倫理」の理解はより深まるであろう。そのために科学の分野（物の科学や心の科学）からの有益なアプローチはないものか——筆者が年来の関心としてきたことである。

ちなみに科学、とくに自然科学は真理を探究する学問だが、「客観的真理」が存在すると思いつくのは誤りであろう。その理論が真理かどうかよりも、どの理論が現実の事象をより明確に説明できるかが問われている。

筆者はこれまで量子物理学や深層心理学に注目して、「純粹倫理」が根ざしている「全一統体の原理」の「一」なる次元に関する論考を書き、拙著『純粹倫理と科学』（倫理研究所、二〇一〇）に納めてある。それらを踏まえた上で、量子物理学の最新の成果を学び直し、とくに理論物理学者のデヴィッド・ボーム（一九一七～一九九二）が提示した「ホログラフィック・パラダイム」に改めて光を当て、深層心理学者のカール・G・ユング（一八七五～一九六二）の共時性理論にも目を配りながら、奇蹟や超常現象の謎に迫ってみるのが本稿のねらいである。

*

量子物理学の発展はめざましい。超ミクロの量子の世界で、もつとも奇妙な現象とされるのが「量子もつれ（quantum entanglement）」である。二〇二二年のノーベル物理学賞は「量子もつれ」を実験的に研究してきた三名——アメリカ・クラウザー研究所のジョン・クラウザー、フランス・サクレー大学のアラン・アスペ、オーストリア・ウィーン大学のアントン・ツァイリッガー——に贈られたことで、馴染みのない「量子もつれ」という用語が一般にも知られるようになった。

二〇二四年の歳末にはNHKスペシャル「量子もつれ アイんシュタイン最後の謎」が放映され、視聴した筆

者は大きな刺激を受けた。なぜならそこには、アインシュタインの共同研究者でもあつた理論物理学者デヴィッド・ボームの存在がクローズアップされていたからである。筆者は物理学の門外漢だが、今から四十年余り前に、奇しくもロンドン大学を訪ね、ボームへのインタビュ映像を収録したことがある。その縁もあつて、当時の筆者はボームが提唱する「全体論的な世界観」に影響を受け、いくつかの論文を書き、その後も関心を持ち続てきた。

新しい発見によつてどんどん学説が塗り替えられていく自然科学にあつても、不易の理論や学説は存在する。いまだ世の常識にはなり得てはいないが、すぐれた理論や学説も存在する。先のNHK番組を視聴して、物理学の範疇を超えて現代社会の「断片化」に警鐘を鳴らしたデヴィッド・ボームの学説や思想に、改めて注目する必要を覚えた。

複雑な数式を用いた精緻な物理理論に門外漢は手も足も出ないが、アインシュタインはもちろん、湯川秀樹にしてもデヴィッド・ボームにしても、彼らが描き出してくれる世界の見方は、人間としていかによく生きるかを研究する倫理学や哲学の徒にも意義深い示唆を与えてくれる。もとより筆者のライフワークである「純粹倫理」や丸山敏雄の研究においても、自然科学の研究成果を無視するわけにはいかない。丸山敏雄は「純粹倫理」の特色の一つとして「科学に立脚し宗教に出入する」と教えたのであるから。